

中世末期および近世初期のヨーロッパにおける 物語の形成と継承

吉 田 正 彦

Wie hat man im Mittelalter und in der frühen Neuzeit in Europa Erzählungen erdacht und weitergegeben ?

YOSHIDA Masahiko

Seit alters her wurden unzählbare Erzählungen erdacht und der Nachwelt überliefert— als Sagen und Märchen mündlich erzählt, als Erzählungen aus der Bibel oder Chronik schriftlich geschrieben und dann gedruckt. Aber heute haben wir nur wenige davon; viele sind verschollen. Warum sind uns die Erzählungen wie Melusinengeschichte, Trojaroman usw. bis heute überliefert ?

Z.B. Trojaroman: der trojanische Sagenkreis war einer der beliebtesten Erzählstoffe des Mittelalters, weil man in Europa leidenschaftlich wünschte, dass sein Volk der Nachfolger der trojanischen Helden sei wie Aeneas, des tapfersten Trojaners nach Hektor. Dabei geht die Sagentradition auf zwei Quellen zurück: auf einen Bericht "De excidio Troiae historia" im 2. Jahrhundert, der vom Phrygier Dares stammen soll, und ein Tagebuch "Ephemeris belli Troiani" von Dictys. Aus den beiden von den angeblich am trojanischen Krieg teilgenommenen Autoren stammenden Quellen wurde im 12. Jahrhundert von Benoît de Sainte-More "Roman de Troie" geschaffen; am Ende des 13. Jahrhunderts bearbeitete Guido de Columnis nach der französischen Versdichtung von Benoît einen lateinischen Prosaroman "Historia destructionis Troiae". Durch ihn wurde der Trojaroman überliefert und von der Nachwelt aufgenommen, die der Nachfolger von Aeneas zu sein wünschte.

Mit dem Melusine-Roman ist es etwas anders: Melusine, eine Meerfee, war die Ahnfrau der seit dem 10. Jahrhundert in Poitou in Westfrankreich nachweisbaren Familie, des Hauses Lusignan. Um 1375 entstand nach alten Meerfeesagen eine Chronik für die Verherrlichung des gräflichen Hauses. Nach dieser Chronik mit der namenlosen Ahnfrau wurden neuerdings zwei Hauschroniken im Auftrag der Dienstherren aus der Familie Lusignan niedergeschrieben: ein Prosaroman "L'histoire de Lusignan" oder "L'histoire de la belle Mélusine" von Jean d'Arras, von Jean Duc de Berry, dem jüngsten Sohn Johannes II. von Frankreich beauftragt, und ein anderer Roman in Vers "Livre de Lusignan ou de Parthenay" von Couldrette im Auftrag des Grafen Guillaume VII. de Parthenay. Nach den beiden Romanen wurden andere Melusine-Romane weiter geschrieben und überliefert: z.B. in Deutschland übertrug der Berner Ratsherr Thüring von Ringoltingen das Werk Couldrettes für den Markgrafen Rudolf von Hochberg: "Dis abenteürllich

Bûch beweyset uns von einer Frawen genandt Melusina die ein Merfaye was". Aber in der frühen Neuzeit und danach blieb Melusine-Roman keine Chronik für ein bestimmtes Haus mehr. Melusine war von nun an die Heldin einer von den einfachen Leuten, die lesen und schreiben können, sehr beliebten Erzählung.

《特別研究》

中世末期および近世初期のヨーロッパにおける 物語の形成と継承

吉 田 正 彦

中世、あるいは近世初期のヨーロッパにおいて、数十年、数百年、時にはそれ以上の歳月を費やして形造られ、場合によっては一特に東方、すなわちインドや中国などから一幾多の国家や数え切れぬ数の都市を経由してヨーロッパに伝えられた「物語（物語群）」が、その多くが当初はラテン語で、後には近代語訳によって後世に継承された。また、ヨーロッパで生れ、同様にラテン語の版で継承されたものの、後には夫々の民族の言語に翻案されて好まれた「物語」もある。だがその一方で、今日に残される数多くの「物語」の背後には、タイトルのみが残される物語も、否、かつて存在したことさえ忘れられてしまった物語も多いはずである。

ここで私たちは物語の「伝承」ではなく、「継承」という言葉を敢えて用いた。通常であれば、当然のことながら、一方が「物語」を次の世代あるいは隣国へと伝え、他方、つまり後世の人々やとなりの都市の住民がその「物語」を引継ぐ。これを考慮するならば、物語の「伝承」とすべきなのだろう。だが物語を次に伝える側とそれを引継いで発展させる後世、その両者が意を通じ合っただけの「物語」を伝え、また引継ぎ続けたと考えること自体、想像の範囲をはるかに超えてしまう。それだけのエネルギーを投入して、過した時代も居住する場所も異なる者たちが「相互に意志を疎通させて伝え、また引継いだ」と考えることが、筆者には想像の域を越えてしまうのである。

そう考えた時に唯一注目し得るのは、次の世代あるいは隣接する都市に物語を「伝えよう」とする意志の有無は別として、物語を前の世代、となりの都市から我が手に引継いで完成させようとする後世の意志、「物語の継承」を目論む時（後世）と場（隣国）の特別な意図に注目することであろう。そこで私たちは敢えて「伝承」ではなく、物語の受け手の意志を重視し、前の世代の意志を無視するであろうことを承知の上で、「継承」の語を用いた。もちろんのことながら、「物語」を次世代に、近隣の都市に伝えようとの意志を否定するつもりではない。受け手の意志の方を重要視してみたいだけなのである。受け手こそが、継承した物語の完成度を高め、口承のみならず、書承（写本、刊本）により、更に後の世に残そうとしたからである。では、次の世代が敢えて「継承」と意図する物語とは、如何なるものだったのであろうか。

例えばゲーテンベルク以降の初期印刷物、すなわちインキュナブラを見てみよう。1500年までの、金属活字植字式印刷機が実用化されてほぼ半世紀の間に、今日では想像も出来ぬほど多くの書籍が出

版されたことはよく知られている。だが、その大多数は書承、すなわち中世の間に既に残されていた「写本」の複製だと言われる。1冊あるいは数冊の手書きの写本を作成するのに比べ、印刷機は写本そのままの複製を、一度に多数作ることができるため、印刷本を「写本」と偽って販売した印刷工房主さえあったという。これを見ても窺い知られるように、初期印刷本の時代には、既に前の世代に作られてあった物語を、複製の手段を手に入れた世代が積極的に受継いで同世代に普及させたと言えるであろう。もちろんそれが金儲けの新たな手段だったからでもあるが。

ところで初期印刷本の写本とされた写本は、その圧倒的に多くがキリスト教の宗教書とその関連書籍であり、それらを収蔵していたのは、少数の例外を除くなら、修道院の図書室だった。その結果、初期の印刷本はラテン語を用いた宗教書が過半を占め、この時代に最も高い識字率を誇った聖職者階層がその読者になった。大部数の複製を作成することが可能になり、書籍は修道院から解放されるはずであった。それにも不拘、書物は印刷されて再度修道院に収蔵されたのである。このことから改めて、前述の意味での「継承」に値する最も重要な物語を含んでいたのが、キリスト教関連書だったことが確認できる。そこにはヨーロッパ全域のカトリック聖職者のための旧新約聖書の釈義書を初めとする専門書から、聖俗ともに頻繁に口にする「詩篇」、そして数ある宗教書の中でも聖書と並んで最も物語性の高い、そして最も多くの伝承を集めたヴォラギネ等の聖人伝はとりわけ一般の信者に好まれ、多くの工房で印刷される出版物となった。聖職者にとり、また敬虔な信者にとって、これ等の宗教書は最も「継承」するに値する、またそうすべきものだったのである。

これに次いで、人々が前時代から積極的に継承しようと意図したのが、ドイツであれば、イソップの寓話集や『ローマの七賢人』のような物語集、フランスから渡来した『トリスタンとイゾルデ』や『メルジネ』など、中世盛期以降に既にドイツ語の翻案が作られ、これもまた写本により伝えられた物語であった。これらを入々は今は印刷本として、自らの手元で継承しようというのである。初期印刷本の時代に前代から引継がれた「物語」は、もちろんこれだけではないし、また印刷された物語だけが継承に値すると考えたわけでもない。しかも物語の中には、創造あるいは形成、そして継承が同時に行われる場合もある。本論ではこれを踏まえ、物語の継承をその形成と関連させ、パターンに分類しながら例示する。

1. 昔話「うたを歌う骨」

先ず「物語」が継承されながら、時間をかけて徐々に今日に伝えられるように形成された例を、グリム兄弟『子供と家庭の昔話集』(KHM)の第7版(1857)から挙げよう。

a) KHM28「うたを歌う骨 Der singende Knochen」(要約)

ある時、羊飼いが橋の上から川原の砂の中に雪のように白い骨片を見付け、自分の角笛の吹き口にして吹くと、角笛が歌い出す。「ああ、羊飼いのお兄さん／あなたが吹くのは僕の骨／兄貴が僕を殴って殺し／この橋の下に埋めたのさ／王の姫さま手に入れようと／僕がやつけた猪奪った」と。かつて獷猛な野猪が畑を荒して家畜を殺し、人々を怯えさせた折に、国王がお触れを出した、「猪を退治した者には姫を妻に取らせよう」と。これを知った兄弟(1812年の初版では3人兄弟、

第2版以降は2人兄弟)は国王の前に名乗り出、ふたりが夫々反対の側から森に入るように助言を受ける。森に出かけた弟はこびとの助力を得て野猪を退治するが、兄は森の外、飲み屋に留まった。弟が森から出たのを知ると、兄は弟を殺して手柄を取上げ、亡骸を川原に埋めたのであった。今それを知り、羊飼いは王のご前にまかり出て角笛を吹くと、笛は改めて兄の悪行を訴える。王は橋の下を掘らせて、砂の中から出た弟の遺骨を丁寧な埋葬し、兄を処刑した。

この物語の特徴は、殺害された被害者の「骨片」が犯人を暴く点にある。そこから一例として思い浮ぶのが、以下に挙げるスイスはアアルガウ地方の伝説である。ベツォルト *L. Petzoldt* 編『ドイツの民間伝説 *Deutsche Volkssagen*』(DV) から紹介する。

b) DV111 「折り取られた骨が出廷する *Der ausgebrochene Knochen vor Gericht*」

昔、ゴンテンシュヴィル村とツェツヴィル村とを結ぶ街道で、明らかに暴行を受けて死んだ男の屍体が発見された。犯人の追及が無駄に終わった時、村人たちは遺体から骨を一本折り取って、レンツブルクの城の鐘の引き綱に結びつけておくことを思いついた。それは代官に正義を訴え、あるいは物乞いをする者が鳴らす鐘であった。何年もの間、骨はそこに結ばれたままだったが、ある時年老いた物乞いの男が綱を引くと、たちまち骨片に血が跳ね散った。彼は捕えられて白状した、若い頃あの男を襲って殺した、と。

ここでは先の昔話とは異り、骨片は歌こそ歌わないが、そのかわりに—これも現実にはあり得ないことであるが一血を噴き出すことによって犯人を暴いている。骨片が血を噴くとは、何を意味するのか。否、骨ではなく、被害者の遺体からの出血を犯人追及の目安にする類の神明裁判は、中世から近世初期のヨーロッパ各地で実際に行われたではないか。「棺審」である。ここでもシュレジア地方、今日のポーランドで1645年頃に起った殺人事件を伝える伝説を紹介しよう。

c) DV113 「棺審 *Bahrrecht*」(要約)

ラウバンの町に住む漂白職人グルーナーは、我が家に立ち寄った取引相手のレース商人を、金品目当てに殺害し、真冬のクヴァイス川に3日間放置した。事件が発覚し、官吏はグルーナーを疑った。そこで官吏は屍体を見に集った村人たちに呼び掛ける。「犯人はお前たちの中にいる。ここに集った者はみな、屍体の額に両手で触れなければならぬ」と。グルーナーの番になり、彼が屍体の額に触れると、鼻から真っ赤な血が流れ出て、殺人犯は捕えられた。

グリム兄弟の兄ヤーコブ *Jacob Grimm* (1785-1863) は弟ヴィルヘルム *Wilhelm* (1786-1859) と共に、マールブルク大学法学部で歴史法律学者ザヴィニー *Friedrich Karl von Savigny* (1779-1861) に師事した。師からヤーコブは、「一国の法制は、その国民固有の文化から内発的に生まれた歴史的産物である」との考えを学んでいる。この理念に基いてヤーコブが1828年に著したのが『ドイツ法律古事誌 *Deutsche Rechtsaltertümer*』であった。時にはゲルマンの古法にまで目を配りながら、ドイツの各領邦や地方の古来の法や慣習等を探り出して、その実行の実例と実態などを古文書から抽出している。それによると「棺審」については「撲殺事件があって、犯人は分らないが、疑わしい者が

ひとりあるいは何人かいる時に実施される。彼ら（被疑者）は棺に歩み寄り、被害者の遺体に触れなければならない。犯人が近寄ると、亡骸は血を流すと信じられた」（Bahrrecht の項）とし、記録に残された実施例を列挙している。すなわち1645年、ポーランドのラウバンでの審判の様態をイメージさせる叙述なのである。この審判法はまた、中世ドイツの多くの領邦国家が制定したいわゆるラント法にも条文が掲げられている。その代表格、アイケ・フォン・レブゴウによる「ザクセン・シュピーゲル」は、ラテン語原本が1221/1224年、ドイツ語版は1224/27年に成立した。その第3巻90章2節によれば「…或る人が彼の親族または友人を打ち殺されたならば、誰が彼（死者）を打ち殺したかを知っていても、彼は彼（死者）を埋葬することができる、ただし、彼が死者とともに裁判所の前で訴を開始した場合は、このかぎりでない。その場合には、彼は彼（死者）とともに訴を遂行しなくてはならず…訴が終了しない間は、彼は裁判官の許可なしに彼の（親族または友人）を埋葬してはならない」とされる（久保他訳『ザクセンシュピーゲル・ラント法』）。

撲殺、すなわち「打ち殺された」被害者の関係者が司直に訴えた場合、被害者の亡骸は埋葬されず、生きている者と同様に原告として出廷しなければならない、というのである。だが実情は違った。事件の解明に時間がかかり、裁判が長引くことが多かったからであろう、死者を裁判に陪席させるには遺体の保存が欠かせない。そのために種々の方法が用いられたのである。ワイン樽に石灰あるいは砂を詰めて遺体を保存したり、内臓を抜き取った後で遺体を乾燥させる等の手段がとられたという。だがある時期以降は遺体そのものに代えて、裁判官の監視の下で遺体の右腕を切断、保存し、この右手を原告として被疑者を訴えた。被害者の右手を用いた14、15世紀ドイツでの訴追例については、裁判の具体的な手続きや進行を詳細に報告した法制史家の研究もある（阿部謹也「死者の社会史」）。棺審のこうした便法を目の当りにした中世、近世の人々の目には、レンツブルクの城の、代官に訴え出、あるいは愁訴するために鳴らす鐘の引き綱に結び付けられた骨片は、とりもなおさず被害者の遺体そのものの象徴と写ったとしても、決して不思議ではなかったのである。

KHM28「うたを歌う骨」では、角笛の吹き口に用いられた骨片がうたを歌う。本来「棺審」では、被害者の亡骸が生きている者と同様に出席して真犯人を暴くのだが、右腕を切断して死者に代えるとの便法が一般に通用していたとするならば一否、少なくとも1300年頃以降の棺審の多くでは、切断して保存された骨片が村の広場に集った人々の前で原告としての役割を務めていたらしい一、漂白職人の欲望の犠牲になったレース商の話等待つまでもなく、レンツブルクの城の鐘の引き綱に結び付けられたままになっていた村人の骨片が血を流したと聞いた者は、すぐに棺審を思い浮べたはずである。そうであれば、昔話「うたを歌う骨」が形造られる過程、また「物語」として形造られながら次の世代によって継承される経緯は、決して複雑ではない。ただ、右腕の骨を原告になしうるとの「便法」の普及の程度が、この昔話の形成と継承の速度を左右したということになろうか。骨片がうたを歌うという非現実的な行為故に、「うたを歌う骨」が棺審という現実の出来事とは一見して無関係と思われたにも拘らず、両者を結びつける象徴を突き止めることにより、物語の成立過程が判明した例である。ただ、骨片が結びつけられた城の鐘の音を、角笛の吹き口にされた骨片の歌声に結びつけることは、残念ながらできないのであるが。

2. 伝説「狼男ペーター・シュトゥンプ」

物語の形成や継承の過程が個々のケースにより大きく異なるであろうことは、想像に難くない。また物語は、当然のことながら、今日に伝わる形に形成された後に初めて継承される例も稀であろう。むしろ1に挙げたケースのように、物語の多くは継承される過程で同時に形成され、また形成されながら次の時代によって継承されるのが通常の場合であろう。それに比べ、次に挙げる物語の例では実際に起きた出来事が報道されるのだが、その際に古くから民間に伝わる俗信が主要な要素として組み込まれたために、出来事は連続殺人という単なる血腥い事件ではなく、むしろ完成度の高い「物語」に仕立てられ、伝説として人々に提供されることになった。

15世紀半ばにグーテンベルクにより印刷機が実用化された、その初期の印刷物が主にラテン語によるキリスト教関係書であることは先に述べた。それに続くのがやはりラテン語による法律や医学書など、学者向けの書籍だという。これに対し、特に宗教改革期になると、世俗語、すなわちイタリア語、英語、フランス語、ドイツ語などの近代語による、平均して32頁のパンフレット類 Flugschrift が挿絵入りで発行されて、例えばマルティン・ルターらにより宗教論争の宣伝手段として積極的に利用された。更に16、17世紀を中心に、これも通常世俗語による一枚刷りのびら「フルーク・ブラット Flugblatt」が、多種多様な内容で大部数が刊行される。大きな木版画、あるいは16世紀末頃からは銅版画の挿絵にわずかな説明文が、通常は活字によって付されている。つまり、挿絵を見れば、文字の読めない者にも内容が理解できる、今日の新聞の祖と言われる印刷物なのである。説明は韻文で書かれ、街角で販売される際には売り子が節をつけてそれを読み上げて売ったとも言われ、そこから民謡が生れ、また挿絵や説明文を含む記事の内容からは、伝説等の「物語」が形成されていったとの指摘がなされている。以下に紹介する例は、先に述べたように、実際に起った出来事に俗信が結びつけられて一編の「物語」に仕立てられたのみならず、誰にも理解できてしかも見た者の創造力を掻きたてる挿絵入りの一枚刷りという印刷物を通して、生れたばかりのその「物語」が継承され、同時にヨーロッパの広範囲に拡散していったケースである。しかも通常とは異なり、後の世代によってではなく、「物語」は先ず同時代の人々の間に拡散し、同時代の人々によって継承されたのである。

「物語」は1589年、この時代のヨーロッパ最大の都市、カトリックと商業の中心地であるドイツ中部の町ケルンの郊外、ベトブル bedbur(今日のベトブルク Bedburg か) 近郊の村で起った。殺人事件である。これを印刷面のほぼ90%を締める銅版の挿絵によって再現し、説明文も活字を用いずに同じ銅板に文字を刻み込んで、事件のあった同じ年のうちに一枚のフルーク・ブラットが印刷、発行された。説明文はクニッテル・フェルス、すなわち4つの強音節を持つ詩行が2行ひと組で韻を踏み、全16詩行から成る。だが、現存する版では詩行の一部は欠落している。こうした一枚刷りの印刷物は、本来は出版元の印刷工房名と工房のある都市名が説明の末尾に記されることになっているのだが、ここではそれも不明なままである。

a) フルーク・ブラット「狼男ペーター・シュトゥンプ」(概要)

「同じ国のベトブルの村はずれ／おれは狼に姿を変えて／…」と、挿絵に描かれた犯行を、犯

人ペーター・シュトゥンプ stump Petter は告白する。「それからおれは子供を10と3人に/女をふたり、そして男をひとり…/けれども気持ちは落ち着かぬ/そこで今度は娘を寝床に引っ張り込んで…/おれの身柄は処刑役人ハンス親方 Meister hanß に委ねられたというわけだ/すると親方はやっこと剣をつかって…」。(図1, Harms S.412)

ペーター・シュトゥンプによる連続殺人事件を扱ったこのフルーク・ブラットは、1589年に売り出された。発行場所はもしかすると、事件の現場に近いケルンかもしれない。挿絵は図の左上、森の中でペーター・シュトゥンプが狼に変身する場面で始まり、彼の処刑までを17.8×28.8cmの手漉きの紙1枚に事件の経過を逐一描いている。冒頭の場面、シュトゥンプの右足を見ると、彼が変身し終えていないことが分る。狼が立ち上がったこの図ひとつで、変身する過程が示されているわけである。その下には人を襲う狼が描かれ、その腹部にベルトが見られるところから、彼が狼男であることが分かる。次の場面からは、事件が発覚して逮捕された後の、ペーターに対する拷問シーンが続く。容疑者は四肢の骨を車輪によってたたき折られた後、同じ車輪に縛り付けられ、ハンス親方とその弟子たちの拷問を受ける。灼熱した鉄器具で身体を焼かれ、熱した布を頭に当てられる。鉞で身体を痛めつけられ、剣で首を刎ねられる。その過程でペーターが白状したのが、このフルーク・ブラットの説明文になったのか。首を失った彼の身体は、愛人および実の娘と共に、積み上げられた薪の山のうえで灰になるまで焼かれ、刎ねられた頭は村外れに常設された処刑場の、絞首台に並んで立てられた柱の天辺に、狼男の象徴としての作り物の狼と並んで村人の前に晒されることになる。先の車輪も今は同じ柱に据え付けられて、彼が犯した殺人の犠牲者の数を示す16枚の木の札が下げられた。

ペーター・シュトゥンプによる連続殺人事件は、このフルーク・ブラットにより各地に伝えられ、人々の関心と呼んだのであろう。これとはほぼ同じ図柄の木版画に金属活字を組合せて印刷されたフルーク・ブラットが、南ドイツのふたつの都市でも出版されて話題になった。印刷はニュルンベルクのルーカス・マイアー Lucas Mair (図2) とアウクスブルクのヨーハン・ネーゲレ Johann Negele の工房であり、共に刊行年は記されていない (Mair, Negele は夫々 Strauss S.701/S.795)。先の銅版画の版と違って、マイアーとネーゲレのフルーク・ブラットは、語の綴り方に多少の相違があることを除けば、説明文は全く同一であり、この時代の出版のあり方が見て取れる。因みに挿絵の上部に付された長文のタイトルまでもが同じなのである。「ある農夫にまつわる本当の、不可思議な出来事/魔法の力により昼の7時間にわたり狼に変わったこと/その結果この1589年10月にケルンの死刑執行人により処刑されたこと」と。しかもこの事件は国外でも反響を呼び、1590年には「ケルンで印刷されたコピーに基き、高地ドイツ語から正確に翻訳された」パンフレットがロンドンで出版されて、事件がより詳細に報じられる。ペーターが12歳で魔術に通じ、その後狼に変身できるベルトを入手したこと、娘のこと、また愛人キャスリン・トロンプインはじつは「夢魔 Suckubs」であったこと等々、あること、ないこと、盛沢山である。とは言え、このパンフレットが典拠とするドイツの「ケルンで印刷されたコピー」の所在は今日に至るまで確認されていないのであるが (Harms 同上)。

ペーター・シュトゥンプの事件は実際に起った16件に及ぶ連続殺人であった。だが彼の自白に「狼

に姿を変えて」との科白が付け加えられたために、現実の出来事が一編の物語に変わってしまった。では、彼の言う「狼男」とはどのような存在と考えられていたのか。そして16世紀末のこの時代に「狼男」が出没した理由、否、こうした俗信が蔓延した理由は何だったのか。

人間が狼に変身するとの想像は、古代の南ヨーロッパでは民間信仰の重要な要素であったが、西ヨーロッパや東ヨーロッパの国々では近代に至るまで広く信じられた。ギリシャ神話によると、アルカディアの王リュカオンはゼウス神の食卓に子供を生贄に捧げたため、狼に変えられたとされる。この神話は、先史時代のアルカディアのリュカイオス山で、ここに奉られたゼウスに生贄が捧げられていたことに関連する。その際、男がひとり狼に変えられるが、その狼が人肉を9年間口にしなければ、彼は人間に戻ることができたという。

狼への変身については、ドイツのニーダーザクセンに伝わる19世紀の民間伝承によると、ある人々が「絞首刑にされた者の皮膚を切り取ってベルトを作り、留め金がななつあるバックルを付けて腰に巻くと、狼になることができる。これを狼男と呼ぶ。色は黒く、中くらいの子牛の大きさである。変身中に誰かにベルトを叩かれて、バックルが撥ねて外れると、素裸の男に戻ってしまう」という。このベルトに関しては別の言い伝えもある。「日曜日に教会の下に亜麻の種を播き、育ったならば日曜日のミサの最中に刈り取って糸を紡ぐ。こうしてできた撚り糸を夜の間に、玄関の扉に掛けておくと、悪魔がそれを持って行き、ベルトを織ってくれる。これを締めた男が狼に変身する」のだというのである（Petzoldt: Lexikon, “Werwolf” の項）。

特殊なベルトを身に着けることにより狼になる、—これは多くの民族の間に古くから見られる俗信、すなわち人間が「ある動物の毛皮を身に纏うことにより、その動物そのものになることができる、換言すれば、その動物に潜在する特殊な能力をわが身に獲得することができる」という民間信仰の名残なのであろう。狼の毛皮（ここでは「ベルト」の形で毛皮の一部分）を身に着けることにより、狼と同じ力が得られると信じたのである。とりわけヨーロッパにおいては狼の存在、狼が持つ神的な力は、古来人々の信仰の対象だった。だが、中世盛期になってキリスト教が広く民衆にまで普及すると、こうした古くからの動物崇拜的な風習は、異教の俗信として退けられた。その結果、ベルトは最早狼の毛皮、あるいはその一部ではなく、町や村外れの処刑場に処刑後も吊るされたままの、忌むべき犯罪者の遺体、あるいは悪魔から入手したとさえされてしまう。しかもこのベルトを締めることで得られると信じられた特殊な能力は、人々がイメージしたような狼の「神的な」能力ではなく、森に入った人を食い殺す「動物的な」力に過ぎなかったのである。

ところが近世初期になり、魔女や魔術師裁判が頻繁に行われるようになると、狼男信仰が再び盛んになる。だが、その際の「狼男」の定義が改めて問題になろう。すなわち、これもまた原始宗教の名残なのであろうか、「羊膜に包まれたままで生れた男たちは魔術師、あるいは狼男と呼ばれて、生れつき特別な能力を与えられている、彼らは偉大な支配者になる運命を負っている」との俗信に基いて、こうした生れ方をした者は自らすすんで魔術師、あるいは狼男を名乗り、人々の支持を得たのであった。だが中世末、そして近世になると彼らは改めて異端者とされ、処刑された。「魔術師」ある

いは「狼男」とは、「魔女」の男性版だったのである。また、このような特殊な生れ方をした場合以外にも狼男を自称するケースがあった。例えばルネサンス期のフランス語圏スイスのアルプス地方では、悪魔のために夜中に狼になって何頭もの家畜を殺して食ったと言いつつ男たちがいたという。彼らは精神病あるいは薬物により異常な精神状態に陥って「狼男」を名乗ったものと思われるが、こうした「狼男」たちは1720年代まで法廷を騒がしたらしく、例えば1717年にザルツブルクの裁判所は「狼男」を自称する5人の男たちに対し、ヴェネチアの艦隊で9年間の「ガレー船漕奴」の刑に服すよう判決を下したと記録される。それによると、ある種の膏油を体に塗り込むことにより狼に変身し、400頭を超える牛を殺したのだという。この頭数が現実にはあり得ない数であるところから、この膏油の「効能」が問題になるのかもしれない。数年後には同じ裁判所でジーマン・ヴィントという男が、先の5人と同じ罪で裁かれ、首を刎ねられた上で体は火炙りにされたという (Sebald S.201ff.)。ペーター・シュトゥンプを思い起こさせるシーンである。

一方これとは別に、ヨーロッパにおける村落の成立から「狼男」を捉えてみることも必要であろう。タキトゥスの『ゲルマニア』をひも解くまでもなく、一面を森に覆われたヨーロッパでは、森林を切り拓いて村がつくられた。つまり、村は人が居住する区域も畑も森に囲まれていたのであり、村人は彼らの村が再び森に侵食されないよう、協力して森と戦わなければならなかった。それ故ここに居住する村人が共同体の掟を冒すようなことがあれば、村から追放された。追放された者は森の中で暮さざるを得ず、その結果、時には餓えて村を荒し、農作物や家畜だけではなく、また時には幼い子供やか弱い女性を攫って食らうこともあったであろう。16世紀を代表するドイツの画家ルーカス・クラナハ Lukas Cranach (1472-1553) も、村を襲って幼児を攫い、森に逃げ込む男を木版画に描いている。彼らも「狼男」と呼ばれたのである (図3, Schmidt Nr.619)。

ケルン郊外で起ったペーター・シュトゥンプによる殺人事件、彼も審理、即ち拷問の最中に狼男であると自白し、魔女同様に異端者として火炙りにされた。何故に彼が自らを狼男としたのかは不明である。彼が愛人および娘と共に処刑されたこと、つまり家庭を持っていたらしいところから推察して、村から森に追放された狼男とは考え難く、むしろ特殊な生れ方をしたことを理由に魔術師や狼男を自称したか、あるいは薬物等により異常な精神状態に陥って殺人を犯した、またはそのように思い込んでしまったのかもしれない。いずれにせよ、ペーター・シュトゥンプが「狼男」を名乗ることで、彼の犯した犯罪は事実を超え、物語化されてしまう。しかも「物語」は、事件があった同じ年のうちに、大量のフルーク・ブラットにより瞬く間に人々に伝えられた。それも仮にこの事件の最初のフルーク・ブラットが、多数の巡礼者と商人が出入りするライン河畔の大都市ケルンで出版されたのであれば、印刷された「物語」は彼らの手を通して他の多くの都市に伝えられても不思議ではなく、更に新たなフルーク・ブラットとして波状的に広まって伝説化され、継承されたことも首肯し得る。

3. 一族の記録「メリュジューヌ物語」

物語を継承しようとの意志が明確に見られる場合、その対象になるのは如何なる物語であろうか。先に見たように、中世末から近世初期にかけての時代には、それは、聖書に依拠しつつ俗説をも混え

て人々に語り掛ける「聖書物語」であり、また聖人伝であった。だが、何らかの力を負わされて、後世が常に継承を意図せざるを得ない物語もある。その一例として挙げられるのが、一族の歴史を綴る物語であろう。この場合、物語の継承者は先祖の辿った足跡をでき得る限り美化し、それに威厳を与える必要に迫られる。ヨーロッパにおいては、こうした物語の典型が「メリュジーン」伝説であろう。

フランスのポワトール地方、ここの領主リュジニャン Lusignan(ラテン語 Lusinia) 家の系譜は遅くとも967年まで遡ることができる。フランス語のメリュジーン、ドイツ語ではメルジーネ Melusine は、「Mère Lusine 母なるリュジーン」を意味すると言う。この主人公の原型を、バラモンの聖典ヴェーダの風の神や、古代ギリシャの神々だとする説がある。だがその一方で、ケルト神話の水や大地の霊などの、自然神的存在がポワトール地方独自の妖精に変化したとする主張、更にはギリシャの著述家ルキアノス Lukian(120頃-180以降)の一節を援用してメリュジーンを、フェニキアでも崇拝されたシリア人の神 Derketo に由来するとする研究さえある。それによると、これはフェニキア・シリア人たちが植民したキプロス島ではよく知られた女神であり、しかも1192年以降にここを領治したのがリュジニャン伯ギュイ Guy de Lusignan だったからだという。

ところで、水の精の姿をしたこの女神にまつわる話はその後、南フランスの商人の手でマルセイユにもたらされて、この港町から遠くないエクス・アン・プロヴァンスに、最古のメリュジーン物語が書き残されて根付いた。イングランドのティルベリ出身の聖職者ゲルヴァシウス Gervasius Tilberiensis(1155頃-1234以降)が主著『皇帝の閑暇 Otia imperialia』(1211)でこの物語を伝えているのである。

a) 『皇帝の閑暇』第3部57章「エベルヴィエ城の貴婦人」(要約)

アルル王国国境にあるヴァランス司教区のエベルヴィエ城の奥方はミサの最中、福音書の朗読が行われてすぐに教会を後にし、聖体拝領の儀式に立ち会おうとしなかった。そこで夫が召使いたちの助力を得て、妻を教会に無理に留めたところ、聖別の祈りの言葉が発せられた途端に彼女は礼拝堂の一部を壊して飛び出し、二度と姿が見られることがなかったという。(ゲルヴァシウス)

b) 同 第1部15章「墮罪のあと瞳いた目」(要約)

エクス・アン・プロヴァンスから遠くないトレ谷、ここにあるルーセ城の領主レイモンはラル川の近くで見事な衣装を身に纏った美しい女性に名を呼ばれる。彼は、彼女の裸の姿を見ないと約束して結婚し、富、権力、そして何よりも大勢の子供と健康とを授かった。だがある時、レイモンは妻の入浴中に被い幕を開けてしまったところ、妻は蛇に変身して風呂の水中に消えてしまう。ただ、真夜中になると幼い子供に会いに訪れる物音のみが、乳母の耳に聞えたという。また、娘のひとりはプロヴァンスの貴族に嫁ぎ、その子孫はゲルヴァシウスの時代にもなお栄えていた。(クードレット、223頁)

ここでは領主の名と地名は明確に記録されるが、主人公の水の精の名は未だ言及されない。

ところで、イングランドの学僧グアルテルス・マペス Gualterus Mapes(ウォルター・マップ Walter Map, 1140-1209)により12世紀の80年代から90年代初頭にかけて書かれた『宮廷閑話集 De

nugis curialium』は、海辺の森で出会った若者と高貴な服装の若い女性との結婚について次のように語っている。

c) 『宮廷閑話集』第4部9章「でか歯のヘノ」(要約)

歯が異常に大きいために「でか歯のヘノ Henno cum dentibus」と渾名される若い領主は、ある日の昼にノルマンディ地方の海岸に近い森で、貴族の衣装を着た若い貴婦人が泣いているのに出会う。婦人はフランス国王に嫁ぐはずであったが、船が遭難してここに辿り着いたのだという。ヘノは彼女と結婚するが、彼の母が嫁の奇妙な行為に気付いた。ミサの際に、聖水撒水や聖体拝領に立ち会わないのである。義母は嫁の寝室を覗き見、嫁が水浴の際に竜に姿を変えることを知って、ヘノに告げる。彼は司祭に相談し、妻に聖水を振りかけると、妻は叫び声を挙げ、侍女と共に屋根を破って空に消えた。ヘノとその妻との間に生れた子供たちは、マベスの時代にも栄えていたという。(クードレット、221頁)

また、ジャック・ルゴフとエマニュエル・ルロワ＝ラデュリの論文「母と開拓者としてのメリュジヌ」によると、ゲルヴァシウスやマベスと同じ1200年頃に、シトー会修道士エリナン・ド・フロワモン Hélinand de Froidmont も「ある貴族と蛇女の結婚」の物語を語っており、その要約を後にある修道士が書き残しているという。

d) 「ある貴族と蛇女の結婚」の要約

「ラングル地方のある貴族が、深い森の奥で高価な衣装を着けた美女と出会い、恋に落ち結婚した。奥方は頻繁に風呂に入ることを好んだ。ある日、蛇の姿をして風呂で泳いでいるところを侍女に見られた。夫に難詰され、風呂で目撃された奥方は永久に消えたが、その子供はまだ生きている」。(クードレット、225頁)

このように幾つもの類似した伝説が並存することから、それら相互の関連が問題になる。これについては、夫々の物語の詳細を比較することで結論が出るかもしれないのだが、少なくとも今日まで、これらの物語の相互関係に関する研究はなされていないようである。だがいずれにせよ、こうした伝説は13世紀のうちにポワトーに定着した。その理由は、ここがキプロス王リュジニャン伯の領地だったからかもしれない。リュジニャン家は遅くとも14世紀初頭には家紋に「水の精」をあしらっており、この頃には、伝説は明らかに伯爵家一族に結び付けられ、1375年頃にはフランス語の韻文による、一族の家系を顕彰する「記録」へと創り変えられている。

だがこの「記録」では満足できなかったのであろう。1400年頃には、一族の縁者の依頼によって、この記録と伝説に基いて2篇の作品が創られる。先ず1387年から93年の間に、ジャン・ダラス Jean d'Arras により『麗しきメリュジヌの物語 L'histoire de la belle Mélusine』、あるいは『リュジニャンの物語 L'histoire de Lusignan』が、一族に縁のあるベリー公ジャン Jean Duc de Berry の命を受けて散文で書かれた。「水の精」は初めてメリュジヌの名を得、夫と共にイエルサレム国王(1186年)、キプロス国王(1192年)、アルメニア国王(1343年)を輩出した輝かしいリュジニャン一族の

始祖として描かれる。

e) ジャン・ダラス『麗しきメリュージュの物語』(要約)

メリュージュはアヴァロンの妖精プレージュの三人娘の長女である。プレージュは森でうたを歌っていたところを、狩に來た国王に見初められて結婚する。だが、出産に立ち会わないとの約束を夫が破ったことから、プレージュは娘たちを連れて姿を消す。後にメリュージュたちは父の行為を知り、懲らしめのために父を山中に幽閉した。このことでプレージュは娘達に対して怒り、罰を下す。すなわちメリュージュは土曜日毎に蛇に姿を変えられるのだが、もし結婚し、その夫が土曜日には会わないと約束するならば、彼女は罰を免れる。夫が約束を破るようなことがあれば、メリュージュは未来永劫にわたって呪われたままになるという。妹たちも罰を受け、次女メリオールはキプロス島ではいたか鶴の番をし、三女パレスティーンは竜に変えられて父の宝物を護らねばならない。そうしたある日のこと、ボワティエ公レイモンは猪狩の途路、森の泉でメリュージュに出会い、土曜日には彼女に会わないと約束して結婚する。彼女はリュジニャン城を建て、夫に幸運と名声をもたらし、夫婦は10人の息子に恵まれる。息子たちは武勇に長け、またキプロスやボヘミアなどの国王になる。ただ彼らには、超自然の存在として生れた何らかの印が残された。たとえば六男は、先に述べた「でか歯のヘノ」のように、歯が異常に大きいといった具合である。ところでレイモンは兄に唆されて、ある土曜日に妻の入浴姿を覗き見てしまう。メリュージュは夫が約束を破ったことは許すが、翼の生えた竜になって天空へ飛び去り、夜になると戻ってきて、末の息子を寝かし付けようとする物音が聞えるのであった。(Enzyklopädie des Märchens, “Melusine” の項)

ダラスによる『メリュージュの物語』はこの後更に、レイモンが禁忌を破った償いをし、メリオールとパレスティーンは罰から解放される。また記述はとりわけメリュージュの勇敢な息子たちとサラセン人たちとの戦いに紙幅の多くが割かれる。すなわち、ダラスは明らかに依頼主の意に沿うことに心を砕いたのであり、闘いにおいて勇名を馳せた息子たちの出世を描くことで、リュジニャン一族の繁栄の礎をメリュージュの息子たちが築いたことを強調しようとした。しかも、彼以前に伝えられた物語に加えて、ダラスはメリュージュの系譜をアヴァロンの妖精と国王エリナスとの娘としたことにより、リュジニャン家が古くから由緒ある家系であるばかりでなく、普通一般ではない、特別な家柄であることを示そうとの意図が見て取れよう。

もう一篇のメリュージュは、クードレット Couldrette による韻文の小説『リュジニャン、またはパルトネの書 Livre de Lusignan ou de Parthenay』で、パルトネ伯ジローム七世 Graf Guillaume VII. de Parthenay の依頼により、ジャン・ダラスに遅れること数年、1401年頃制作された。その叙述はダラスに類似しているのではあるが模倣ではなく、むしろ1375年頃に創られたフランス語の韻文による共通の手本、一族の家系を顕彰する「記録」に依ったためと考えられる。とは言えクードレットの作品は、知識人ジャン・ダラスが捨ててしまった多くの俗信を残しているところに特色がある。なお、クードレットはパリの書籍商と言われるが、詳しい素姓は不明であり、聖職者あるいはパルトネ伯お抱えのトルヴェールとの説もある。

f) 『リュジニャン、またはパルトネの書』(要約)

ポワティエ伯エムリは、従兄弟に乞うてその末息子レイモンを身近に仕えさせた。ある日のこと、伯はレイモンを従えて狩に出るが、コロンビエの森で野猪に襲われ、それを退治し損なって倒れる。ところが不運にも、同じ猪を狙ったレイモンの槍が伯の腹に命中して、彼は主君の命を奪ってしまう。悲嘆に暮れ、嘆きながら森をさ迷っていると、湖の辺で三人の貴婦人に会い、そのひとりから名を呼ばれる。レイモンは彼女に慰められ、また占星術に長けた伯が先刻レイモンに告げたばかりの預言が、彼女と結婚することにより、実現するであろうと告げられる。すなわち、今ある男が主君を殺せば、彼は親類の誰にもまして裕福で高位の身分になる、との予言である。自分が名前と呼ばれたこと、自分のことは全て知っていると貴婦人の言葉に驚きつつも、彼は悲痛が和らぐのを感じる。そして彼女との結婚についても、彼女の申し出たように、彼女の土曜日の居場所は詮索しないと固く誓ったうえで、承諾する。すると貴婦人はレイモンに、亡くなった伯の城に戻ってからの身の処し方を細かに教え、彼もそれに従った。こうしてレイモンの妻となったメリュジヌは不思議な力を発揮し、コロンビエの森に城を築いてリュジニャンと名付け、その後数多くの街を作り、また幾つもの教会を建立させた。その間彼女はユリアンを頭に、でか歯のジョフロワを含む十人の息子をもうける。クードレットは、恐らく依頼主の意向に沿おうとしたのであろう、レイモンとメリュジヌの出会いと結婚、リュジニャン城を中心にした一族の隆盛、そして息子たちの誕生—この作品でも息子たちは、でか歯のジョフロワのみならず、夫々に超自然の存在としての特徴が与えられる—、また成人して後の彼らの勇猛果敢な冒険が次々に報告される。ユリアンが弟ギイを引き連れてキプロスに向い、サラセン軍に包囲されたキプロスを救って王女を妻としてキプロスの王位を継いだこと、またキプロス王女の叔父のアルメニア国王がギイを姫の夫に迎えて王国を継がせたこと等々、七千行に及ぶ大作の凡そ半分は息子たちの活躍と国王への出世等の描写に費やされる。しかも私たちがメリュジヌの素姓を知るのはその後の楽しみにとって置かれる。他ならぬジョフロワの冒険に照明が当たった場面、作品の五千詩行に及ぶところで、ジョフロワがある岩穴で祖父エリナス王の墓碑銘を発見するのである。ここで初めてクードレットはメリュジヌの祖に関して私たちに語りかける。しかも、ダラスに比べてより詳細に。以後の場面で作者が、高齢に達して気の荒いジョフロワの最期と、彼に従った弟のティエリについて報告することを望んでいるからである。すなわちジョフロワはかつて、弟のひとりが修道士になった時に、それを修道院長に教唆された故のことと思い込んで怒り、弟を含む多くの修道士が籠るその修道院に放火し、破壊したのであった。改めてでか歯のジョフロワは、教皇の命に応じて当のマイユゼ修道院を再建し、ティエリにリュジニャンと「パルトネの殿」の称号とを継がせた。今、彼の亡骸はマイユゼ修道院で眠り、「パルトネではティエリの家系がいまもたしかに支配している(松村剛訳 V.6686)」。 (クードレット)

クードレットの作品の特徴は、前述のようにこの作品の依頼主であるリュジニャン、あるいはパルトネ家の祖を神格化し、称揚する目的が明白な点であろうか。とりわけて多くの紙幅をメリュジヌの息子たちの活躍に割いた点には、作者の意図が明瞭に見て取れる。リュジニャンあるいはパルトネ家

の今日の繁栄を、始祖の特殊な素姓や彼らの勇猛果敢な活躍がもたらした当然の結果であると、クードレットは結論付けたいのである。なかでも、長兄ユリアンと弟ギイの果敢な戦いぶり、その結果もたらされるキプロスの王位およびアルメニア王位の継承、そしてでか齒のジョフロワについては比較的多くの紙幅を割いてその生涯が語られる他、末弟ティエリとの関係、ティエリによるパルトネ家の基礎づくりと、ティエリが兄の助力を得ながらも依頼主パルトネ一族の始祖となったことを強調するのである。15世紀初頭という騎士時代末期、すなわち文学的には叙事詩形式が時代遅れになろうとしているにも拘らず、ダレスの散文作品に抗してわざわざ韻文による叙述を選んだ理由も、また前述のように俗信を数多く残したのも、先祖の「神格化」に好都合だと考えた上での選択だったのかもしれない。その点では、一族とその先祖の由来に関する伝承を、我が手で、確かな形のある「物語」に創り直して「継承」しようとの意図が、ジャン・ダラス以上に、クードレットには見られる。

「物語の継承」の観点からメリュジヌ作品を見た時、先に述べたようにダラスにせよクードレットの作品にせよ、彼らの依頼主の意図は明白である。古くから伝わるメリュジヌ伝説を、否、本来メリュジヌには名前もあたえられていなかったらしいのだが、リュジニャン家の年代記に取り込んで彼女を一族の始祖に据え、水の精という超自然の存在であることを巧みに利用して、彼女の子孫である一族の特殊性を強調する。メリュジヌの息子たちの異様な風貌と勇猛な活躍ぶりも、超自然の存在が顕在化した証しであろう。だが、ダラスにせよ、またクードレットにせよ、キリスト教が本来忌避すべき彼らの特性を、例えば晩年のジョフロワが修道院を再建してそこに埋葬されたと付け加えることで、キリスト教への帰依の証しとし、リュジニャン一族が決して反キリスト教的ではなく、むしろ宗教面でも称揚するに値する家柄であって、一族の今日の繁栄はこうした先祖を戴く者の当然帰結するところであるとして、依頼主に応えたわけである。

メリュジヌの物語はその後、一リュジニャン家とは関係なくドイツのテューリング・フォン・リンゴルティンゲン Thüring von Ringoltingen (1415頃-83) によりドイツ語に翻訳される。題して『冒険の書一海の妖精メルジーナと呼ばれる婦人について物語られる Dis abenteuerlich Büch beweyset uns von einer Frawen genandt Melusina die ein Merfaye was』。クードレットの作品を、ある一族の年代記、真の歴史書と信じて、1456年にバーデン王家に連なる辺境伯ルードルフ・フォン・ホッホベルク Rudolf von Hochberg に捧げたのである。テューリングの『メルジーナ』はその後1474年に南ドイツ、アウクスブルクのヨーハン・ベルマーの印刷工房から71もの木版挿絵を添えて刊行され、更に民衆本としては40を超える版が民間に流布したという(図4)。これは最早ダラスやクードレットのように名家一族の歴史や、また素姓への関心ではなく、ドイツ語の読み書きができる一部の市民階層の好みにこの物語が一致した証左ではないか。テューリングの民衆本に続き、ハンス・ザックス『メルジーナ』(1556)、ヤーコブ・アイラー『麗しきメルジーナ』(1598)、ユストゥス・ツァハリエのメルヘン、ルートヴィヒ・ティーク『麗しきメルジーネの不思議な物語』(1800)、ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』に挿まれた「新メルジーネ」と、ドイツではこの後、民衆の好みはメルジーネの物語を「継承」する動機になったと言ってよいであろう。

4. 歴史書としての「トロイア物語」など

物語の継承の型は多様である。中世ヨーロッパで最も好まれた物語の代表とされる「トロイア物語」群は、例えばフレデガー Fredegar が7世紀の最も重要な史料とされる『年代記 Chronicon』においてフランク族の始祖をトロイア人と言及するなど、ヨーロッパの諸民族が自国民の起源をトロイアあるいはトロイアの武将アエネイアスに求めたところから、十分に継承さるべき価値のある物語と考えられた。中世において最も重要な原典とされた匿名の報告『トロイア滅亡史 De excidio Troiae historia』は2世紀に成立し、フリギア人ダーレス Dares に由来するとされた。彼は自らトロイア戦争に加わったといわれる。同様にトロイア戦争の参加者といわれるディクテュス Dictys に由来し、ルキウス・セプティミウス Lucius Septimius のラテン語版で伝えられた『トロイア戦争日記 Ephemeris belli Troiani』、そして匿名の作者による『トロイアの滅亡 Excidium Troiae』も、中世盛期における諸々の「トロイア物語」隆盛の最も重要な拠り所であった。もちろんホメロスや、特にヴェルギリウス、オヴィディウス等も等閑視することはできない。だが12世紀にダーレスやディクテュスを典拠に、フランス語の韻文小説をサント・モールのブノワ Benoît de Sainte-More が著した『トロイア物語 Roman de Troie』(1165頃)である。これをメッシーナの詩人グイド・デッレ・コロネ Guido delle Colonne(G. de Columnis, 1210頃-1287以降)がラテン語に翻訳、歴史書『トロイア滅亡史 Historia destructionis Troiae』として全ヨーロッパに普及する。コロネは初期印刷本としても多くの版を重ねた(図5)。

一族の正統性を証明するために伝承を創り直して物語の継承を企てる「メリュージヌ物語」と異なり、「トロイア物語」ではヨーロッパの幾つもの民族が、自国民を勇猛なトロイアの英雄の末裔であると主張して、物語の継承を図った。だが、これらとは全く別の継承方法に出会うこともある。一例として、これもまた中世のヨーロッパで非常に好まれた物語『[ローマの]七賢人の物語』を挙げよう。東洋で生れた物語群がシルク・ロードに位置する国々や都市に定着してその地域の物語に変わり、その間にはもちろん登場人物の名前などもその土地に相応しく変えられるのだが、多くの年月を経て更に隣りの国、あるいは都市により継承される。そのひとつ、「シンドバード物語」と命名される物語群は、インドで形成され、ペルシャに伝った後、更にシリアで「シンドバン」、ギリシャに渡って「シュンティパス」、西洋中世ではラテン語による「七賢人の物語」あるいは物語集「ドロパトス」と名を変えて写本として伝えられ、後には印刷されて多くの読者の目に触れた。この継承の経緯は、フランスの文献学者ガストン・パリス Gaston Paris により1874年に解明された。しかも、ヨーロッパにまで継承された一話が、グリムの『昔話集』第5(1843)、第6版(1850)に「盗賊とその息子達」として収められた。だがその後、13世紀にロートリンゲンのシトー会アルタ・シルヴァ修道院の修道士が残した「ドロパトス」の写本から15世紀初頭に書き写された話が、ドイツに由来する昔話としてグリム兄弟の手元に渡ったことが判明して、『昔話集』から省かれたこともあった。一方、この物語は朝鮮半島を経由して我国にも伝わり、『今昔物語集』巻の十に「震旦ノ盗人、国ノ王ノ倉ニ入りテ財ヲ盗ミシニ、父ヲ殺セルコト」として残されたことが、松原秀一氏により近年明らかにされている。

以上、物語の多様な「継承」の形態のなかから、幾つかをみて来た。ここに挙げた具体例を見れば明らかなように、物語の継承は常にその形成と相互に関係を持っている。昔話や伝説のような口承の物語であれ、また狼男シュトゥンプの物語のように、フルーク・ブラットによる報道から生れた書承の物語の場合でさえ、物語は継承されるうちに完成度が高まることは、否定できないであろう。即ち個々の「物語」において、継承と形成の過程には互いに関連があること、物語毎にその関連の濃密さが異なること、そしてどの物語においても形成と継承との関連が濃密である程、物語の完成度が高いのではないかと、今のところは推測している。このことは、物語を一族や一国の「年代記」に仕立て上げた場合にもあてはまる。今後は、特に中世から近世初期のヨーロッパで好まれた幾多の物語を更に比較分類しながら、この時代の物語の継承を更に究明する予定である。

参考文献

- Enzyklopädie des Märchens, begr. von Kurt Ranke, hrsg. von Rolf Brednich in 13 Bdn. Berlin u. New York/1977 ~ (第13巻は未刊)
- Grimm, Jakob und Wilhelm: Kinder- und Hausmärchen — Ausgabe letzter Hand mit den Originalmerkungen der Brüder Grimm in 3 Bdn. Stuttgart/1983,1991 (KHM 番号で表記)
- Grimm, Jakob: Deutsche Rechtsaltertümer Darmstadt/1989 (4.Aufl.)
- Harms, Wolfgang(hrsg.): Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. und 17. Jahrhunderts Bd. IV Tübingen/1987
- Kindlers Literatur Lexikon in 25 Bdn. München/1974
- Petzoldt, Leander: Kleines Lexikon der Dämonen und Elementargeister München/1990
- : Deutsche Volkssagen München/1978 (2.Aufl.) (DV 番号で表記)
- : Historische Sagen in 2 Bdn. München/1976,1977 (DH 番号で表記)
- Schmidt, Hugo: Bilder-Katalog zu Max Geisberg, Der Deutsche Einblatt-Holzschnitt in der ersten Hälfte des XVI. Jahrhunderts München/1930
- Sebald, H.: Hexen — Damals und Heute — Frankfurt. a. M./1987
- Strauss, Walter L.(ed.): The German Single-Leaf Woodcut 1550-1600 in 3Vol. New York/1975
- 阿部謹也「死者の社会史」,『社会史研究』第4号 日本エディタースクール出版部/1984
- クードレット/松村剛訳『メリュージヌ物語』 青土社/1996
- 久保正幡, 石川武, 直居淳訳『ザクセンシュビーゲル・ラント法』 創文社/1985
- ティルベリのゲルヴァシウス/池上俊一訳『皇帝の閑暇』 青土社/1997
- 藤代幸一訳『クラーベルト滑稽譚 麗しのメルジーナ』 国書刊行会/1987
- 松原秀一『中世ヨーロッパの説話』 中公文庫

